北タイ班Ｂ

タイ北部におけるムラブリの資源利用をめぐる初期的報告

池谷和信（国立民族学博物館）

キーワード：資源利用、農耕、エコツーリズム、環境保全、ムラブリ、モン
調査期間・場所：2003 年 10 月 19 日― 29 日、ナン県およびパヤオ県

A Preliminary Report on Resource Use among the Mrabri in Northern Thailand

Kazunobu　Ikeya (National Museum of Ethnology)

Keywords:　resource use, farming, ecotourism, environmental conservation, Mlabri, Mon
Study Area: Nan province, Phayao province

1. はじめに

タイ北部には、「山地民（山岳小数民族）」と呼ばれる人びとが暮らしてきた。アカ、リス、カレン、モン (Hmong, 以前は Meo や Miao と呼ばれていた)、ヤオ、ラフなど、かつて焼畑を中心とした生業に従事していたことから「焼畑農耕民」としてよく知られている。これらの民族は、1960 年代から研究の対象にされ数多くの調査報告があるために、先行研究の整理をする必要がある。たとえば、本プロジェクトの北タイ班に所属する増野氏は、研究動向のレビューをすると同時に、ヤオにおける焼畑以降の生業複合の変化に関して生態人類学的調査をすすめている。

その一方で、タイ北部の山地には、ムラブリ（M labri、タイ語ではピートールアン、注 1 参照）と呼ばれる「狩猟採集民」が暮らしてきたことはあまり知られていない。ムラブリは、中国、ベトナム（樫永、私信）、ラオス (Chazee 2001) などの山間部にも生活しており、その数は少ないとはいえ、本プロジェクトが対象とするメコン川流域における山地の資源利用全体を考える上でも無視できない存在である。

しかし、ムラブリを対象にした人類学的研究は断片的に行われてきたにすぎない (Trier1981 など)。タイのムラブリに限定すると、民族考古学 (Pookajorn ed. 1992)、言語学（Tongkum1992、坂本 2001 など）の報告はみられるものの、彼らの生活の現状を示す文化人類学的研究は少ないのが現状である。1990 年ごろのプレー県のムラブリの社会経済変容の例として、交易品や交易によってムラブリが入手する物の変化が記載されている (Vongvipaku 1992)。

この報告では、タイ北部におけるムラブリの資源利用に関わる現状およびその生態史的変化を把握することを目的とする。調査地域は、タイ北部のナン県 (Nan province) のムラブリが暮らす集落である。なお、対象地域は、メコン川の支流イン川上流域に隣接しており、本論で述べるような国立公園の設立計画などを考えるうえで、本地域とイン川上流域との関係を無視して論じることはできない。現地調査は、2003 年 10 月下旬に短期間行われたにすぎず、今回はあくまでも初期的な報告である。

2. ムラブリの人口、集落の小史

筆者の調査によると、2003 年 10 月現在、タイ北部には、ナン県に 1 ヵ所とプレー県 (Phrae province) に２ヵ所のムラブリが暮らす集落が存在する。それぞれの正確な人口数は把握できないが、おのおの 120 人（本稿の調査地）、150 人（注２）、不明である。なかでもプレー県の 1 ヵ所の集落では、キリスト教の布教をすすめる人びとが、20 年近く活動してきており、彼らは Ban Luang 北側の山地をムラブリの土地にしようとするプロジェクトを進めている。

ここでは、筆者が調査地として選定したナン県の集落の事例を紹介する。ホイユオク村 (Ban Hiol Youck) は、１つの村のなかでムラブリとモンとが別々に暮らす集落である。ここにアクセスするには，道路の整備が遅れて

いるために 4 WD の車輌が不可欠である。さらに、最寄りの道路からムラブリ集落に行くには、急坂をわずかに歩く必要がある。集落内には、水道の管が目に付き、電気はひかれていない。ムラブリ地区の裏山には道があり、途中でモン居住区への道と奥山へ行く道とに分かれている。

集落は、ムラブリ地区とモン地区とに分かれている。まず前者は、Doi Phu Kheng（標高 1403 メートル）の北東斜面に、4 年前（1999 年）に形成された村である。モン地区から約 500 メートル離れた所に位置している。人口数は、上述したように約 120 人を示す。ここでは、ゆるやかな斜面に家屋が立地している。人びとの来歴に関する詳しい調査をしていないが、人びとのなかには、Doi Pha Chik (1253 メートル) などの野生動物の豊かな山地から移住してきたひともいる。一方で後者には約 600 人（93 家族）のモンが暮らし、およそ 26 年前（1977 年）につくられた地区であるという。

3. ムラブリの資源利用

ムラブリは、相手によってムラブリ語およびタイ方言をうまく使い分けている。また、フンドシ姿の男性が 2 名いたが、数時間後にはズボンに変えていた。彼らの住居は、竹製の家で、屋根にヤシの葉を使っている。家のなかにベッドを置いている人がいると同時に、ラジカセを所有する家が 2 軒ある。

彼らは、近隣に暮らすモン（注３）との関係を結んだ生業に従事している。主な仕事は、モンへの農業労働の提供である。モンのトウモロコシ畑などの労働によって、1 日でブタ肉を２－３キロ（注４）、あるいは米を 6 － 10 キロ、入手できるという。なお現在、ムラブリ独自の畑が 2 ヵ所あるのみである。 1 つは個人で、もう一つはモンの共有地を利用している。NGO や政府は、ニワトリやブタの飼育、マッシュルームの栽培などをムラブリに導入しようとしてきたが、これまでその試みは成功していない。

彼らの生業として、観光客がこの地域に訪問した際のパーフォーマンスが挙げられる。ムラブリの中年男性は、上半身裸のフンドシ姿になって、森の中での小型動物の狩猟およびシェルター製作などを観光客のまえで実演する。女性は、根茎類の採集をみせる。ムラブリは、その見返りとして、業者との仲介をするモンからブタ肉を入手する。さらに、生業として森林産物の交易が挙げられるが、現時点では具体的な実態を把握していない。

近年、ムラブリ自らによる外部社会への積極的な働きかけもみられるようになった。たとえば 2003 年 7 月に、ムラブリが政府に電気の設置を要求しているという。しかし政府は、ツーリズムの振興の側面からムラブリの村に電気をとおしていないといわれる。また、政府の役人、ムラブリ、モンの観光ガイドによる、観光振興をすすめるための話し合いが行われている。さらに、現在、ムラブリの暮らす地域は、プサン国立公園から南に伸びる方向に位置しており、そこを国立公園に含める計画がある。ムラブリも関与して、NGO、ミッション、政府などでの話し合いが進められている。

４．今後の課題：メコン川流域の山地の資源利用モデルの構築

以上のように、この報告はムラブリの現況に関する初期的報告にすぎない。筆者は、今後の現地調査によって、彼らの資源利用の現在と過去の全体像を生態史的視点から把握する計画でいる。ここでは、現時点における残された課題の一部を記述しておこう。どうしてムラブリはブタ肉を求めて労働するのか、どうしてムラブリはモンとの婚姻がないのか？（1 例のみある）、どうしてムラブリはニワトリを飼わないのか、どうしてムラブリは自分の畑をつくらないのか、ムラブリが利用してきた山地をめぐる国立公園化の動きにムラブリはどのように対応できるのかなどである。

今後は、以上の疑問点に答えると同時にムラブリの山地資源利用の変遷を把握する予定でいる。それによって、森林伐採や農地の拡大などの外的影響を受けて、ムラブリがどのようにして森との深い関係からモンとの共生関係に変えたのか、また山地資源の利用が衰退しても観光パーフォーマンスなどを通して、いかに「森の民」としてのアイデンティティを維持してきたのかなど、ムラブリと山地資源との関係のダイナミズムが明らかになると、筆者は予測している。

最後に、冒頭で述べたような、タイ北部における「焼畑農耕民」の資源利用の生態史的変容とムラブリのそれとの比較研究は、「北タイの山地地域、将来的にはメコン川流域の山地地域における資源利用に関する一般モデルの構築」を考えるうえで不可欠な作業になるであろう。そのひとつの試みとして、本プロジェクトの北タイ

班の増野氏の調査しているヤオの事例との比較検討をすすめることは 2004 年度の課題として大きく残されている。

注　1）ピートールアン (Phi Tong Luang) では、ピーは精霊を意味しトールアンは黄色の葉を意味する。
2）2001 年 1 月現在、プレー県ローンクワン郡フワイホム村のムラブリの人口は、117 名であるといわれる（坂本 2001）。
３）プレー県においても、ムラブリはモン (メオ Maeo) との相互関係を結ぶといわれる（Vongvipaku 1992：98）。
４）プレー県のムラブリの事例では、２日間のモンへの農耕労働に対して、その代償として８－９のブタ肉が要求されている（Vongvipaku 1992）。

参考文献

Bernazik,H.D. 1951 The Spirit of the Yellow Leaves. Robert Hale Ltd.
Chazee,L. 2001 The Mlabri in Laos:A World under the Canopy. White Lotus.（タイのムラブリに関しては、90－96 頁に記述がある）
坂本比奈子 2001 ムラブリ族の現状と未来 : 危機言語と言語学者の役割。講演要旨。
Trier,J. 1981 The Khon Pa of northern Thailand: an egima. Current Anthropology 22(3): 291-294..
Pookajorn,S. ed. 1992 The Phi Tong Louang(Mlabri):A Hunter-Gatherer Group in Thailand. Odeon Store.
Tongkum,T.L. 1992 The language of the Mlabri(Phi Tong Luang). 同上所収。
Vongvipaku 1992 Economic and social changes among the Mlabri. 同上所収。